

令和元年6月18日現在

機関番号：13201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2018

課題番号：17K13367

研究課題名(和文) ソフィ・カルの芸術表現

研究課題名(英文) The Art of Sophie Calle

研究代表者

松田 愛 (Matsuda, Ai)

富山大学・芸術文化学部・講師

研究者番号：40722260

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、フランスの現代美術作家ソフィ・カルについて、彼女の作品解釈と切り離せない展示空間に着目することで、その表現の独自性を考察した。初期から最新作までを扱った個展およびグループ展など、2017-2018年に行われた実際の展覧会を実見・調査しながら、作品とその展示構成について分析した。旧作品と身近な家族の死を題材とした近年の作品を組み合わせた「DEAD END」展(シャトー・ラ・コスト、2018年)では、身近な人々の喪失や不在と向き合いつつも、綿密に構築された展示空間からは、自身の物語を普遍的な物語へと転換させる虚構の力ともいえるべき、彼女の芸術表現の特質を見出すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

政治的状況や環境問題など、社会的テーマを探求するアート作品が注目される国際的な現代美術の状況の中で、ソフィ・カルは、活動の初期から現在に至るまで、主として自身や他者の個人的な物語から出発して、根源的で普遍的なテーマを追求する作品を作り続けている。個人の物語を、多くの人々が共感できる客観的な作品へと組み立てていくその方法を、展示空間に着目して読み解くことは、彼女の芸術表現の意義を考える上で重要であるだけでなく、私たちの生と芸術のつながりを考察する上でも大いに示唆に富むものとなる。

研究成果の概要(英文)：This study considered the uniqueness of the expression of French contemporary artist, Sophie Calle by focusing on her "exhibition space" which can not be separated from interpretations of her works. This study analyzed the works and their composition in the exhibition space, while investigating the actual exhibitions held in 2017-2018, such as solo exhibitions and group exhibitions that contained both the initial works and the latest works. At her "DEAD END" exhibition (Chateau La Coste, 2018), which combines recent works on the death of her families and old works, she confronted the loss and absence of familiar people. At the same time, her carefully constructed exhibition space made us feel the characteristics of her artistic expression, that is to say the power of fiction that transforms her own story into a universal one.

研究分野：美学美術史学

キーワード：ソフィ・カル 美術史 現代美術 写真 テキスト

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

フランスの現代美術作家ソフィ・カル(1953、パリ生まれ)は、写真とテキストを組み合わせた自伝的表現を中心に世界中で作品を発表している。自らの個人的な体験から出発しながら、他者との距離やコミュニケーションについて、また「不在」や「不可視」をめぐる問題など、根源的で普遍的なテーマを追求している。

美術を超えて写真や文学、映画、パフォーマンスなど多岐にわたるカルの表現を、社会学者ソヴァージュは、「カメレオンの芸術」と呼ぶ(Sauvageot, 2007)。他方で、美術史家ボワ(Bois, 2000)やカマル(Camart, 2003)は、カルの表現を60年代末のパリのシチュアシオニスト達の活動と関係づける。彼女の作品を特徴づける、旅と漂流、真実と虚構、自己と他者の距離、不在と不可視への関心は、すでに様々に論じられてきた。筆者はかつて、豊田市美術館所蔵の《盲目の人々》(1986)に着目し、作品分析とあわせて作品の展示方法や展示構成を分析することで、カルにとっての「美」とは何かを考察した(松田, 2017)。

本研究では、同様の手法を引き継ぎながら、ソフィ・カルの初期から現在までの作品を対象に、作品分析に加え、作品解釈と切り離せない展示空間に着目することで、彼女の表現の独自性を考察することを試みた。

2. 研究の目的

本研究では、初期から最新作までを扱ったソフィ・カルの個展やグループ展など、実際の展覧会を実見・調査しながら、彼女の展示空間がどのように構成され、その中で作品をどのように展開しているのか、また、そのような展示構成を通じて、自身のテーマをどのように視覚化しているのかを読み解くことで、彼女の芸術表現の意義を明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

ソフィ・カルは現在も多くの展覧会で新作を発表し、新作と組み合わせる形で旧作品を発表している。そのため、2017年度から2018年度にかけて開催されたソフィ・カルの個展および主要なグループ展を可能な限り実見・調査し、作品分析と展示空間の分析を行った。また、展覧会の趣旨や意図について、展覧会担当者へのヒアリング調査を行なった。

4. 研究成果

最も重要な成果としては、個々の展覧会の調査から、作品の配置や構成など展示空間に対する配慮だけでなく、展覧会の開催される会場の特性も考慮しつつ、カルが細心の注意を払って展示を組み立てていることが明らかになったことである。特に、自身の個展でカルはしばしば展覧会テーマに合わせて、新作と旧作を組み合わせながら展示している。このことは、旧作品であっても、展覧会の文脈や展示方法などによって、異なる見え方が可能になり、新たな解釈の可能性が生まれることを示唆するものといえる。

2017年のパリ狩猟自然博物館で開催されたカルの個展「Beau double, Monsieur le marquis! Sophie Calle et son invitée Serena Carone」(2017-2018)では、初期の《ヴェネチア組曲》(1980)から、身近な家族の死を題材とする新作までが発表され、2003-2004年のポンピドゥ・センターでの個展以来の大規模な展覧会となった。本展では、狩猟自然博物館の空間を生かし、既存のキャビネットや常設展示にカルの作品が溶け込むようにして展示された。このような既存の展示への介入という方法は、2019年春にマルセイユの5つの会場(博物館や美術館、教会)を用いて開催された個展でも受け継がれることとなった。

また、サンフランシスコのフォート・メゾン・センターで開催された個展「Missing」(2017)では、海辺のアートセンターという場所の特性を生かした作品の配置や展示構成が工夫されていた。

2018年にフランスのル・ピュイ＝サント・レパラードのシャトー・ラ・コストのアートセンターで開催された個展「DEAD END」は、敷地内の森にパーマネント・コレクションとして設置された新作インスタレーション《Dead End》(2018)に加え、新作と旧作を交えた2つの展示(2つの会場)で構成された展覧会とからなる。同センターのディレクターによれば、カルはパーマネント・コレクションの設置場所を決定する際、森を散策する人々の導線を考慮しつつ、行き止まり地点という最適な場所を選択した。

また、展覧会においても、屋外のパーマネント・コレクションとつながる形で、「死、喪失、愛」というテーマを掘り下げるインスタレーションを、アートセンターの2つの会場で展開した。1つ目の会場では、「あなたの死者にどのように向き合うのか」との言葉が会場入り口の壁に掲げられ、(1)同じ問いかけで始まる新作《セリ・ノワール》(2018)(2)父、母、猫という身近な家族の死を題材とする《私の母、私の猫、私の父の順番で》(2012-2018)(3)旧作と

なる《墓》(1990)の3つのシリーズが展示された。もう1つの会場では、カル自身の失恋の体験をモチーフとした《限局性激痛》(フランス語版、1984-2003)が、広々としたギャラリースペースと、それを囲む2つの狭い通路という空間の特性を生かしたインスタレーションとして展開された。

本展覧会からは、1990年の旧作から現在の作品に至るまで、カルが一貫して、身近な他者の「喪失」にどのように向き合うのかという普遍的なテーマを探求し続けてきたことがうかがえる。自身の失恋や身近な家族の生と死など、親密かつ痛みを伴うテーマを扱いながらも、それらを、ユーモアをたたえた普遍的な物語として、いわば展覧会を1つのフィクションの場として構築することで、ソフィ・カルの表現は多くの鑑賞者に深い共感をもたらすことに成功しているといえるだろう。

また、初期作品《眠る人々》(1979)については、2017-2018年にブレーメンのパウラ・モーターゾーン=ベッカー美術館で開催された展覧会「眠り」に出展された1点を実見・調査できた。本作品についての考察は、2019年7月に開催される第21回国際美学会(ベオグラード)で発表する予定である。カルのその後の表現へとつながる重要な作品であるため、本作品については、同時代のコンテクストなど、さまざまな観点から引き続き研究を進めていく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

松田愛「ソフィ・カル『DEAD END』展から見える風景」『富山大学芸術文化学部紀要』第13巻、2019年、62-68頁(査読・無)

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）:

(2)研究協力者

研究協力者氏名:

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。